

# 聞名仁教

第116号  
(発行日)

2020年5月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638113 西宮市  
甲子園口2丁目7-20  
電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp

http://nenbutsuji.info/

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月22日 午後2時始  
(8月は休みます)
- 〈念仏座談会〉8月は休み  
毎月12日午後3時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉  
毎月6日午後7時始
- 〈真宗入門講座〉(副住職担当)  
毎月18日午後6時30分始

## 運命は一瞬で変わる

最近読んだ本の中で「運命は一瞬で変わる」という言葉にであいました。こういう言葉は以前にも聞いた

ことが何度かあったように思います。現在、特に心に響きます。新型コロナウイルスの流行は世界の情勢を一変しましたし、個人の生活に於ても、事業や商売があつというまに窮地に立たされた人も多いと思いま

す。もちろんコロナだけのことでではなく、私たちの人生でも、一瞬にして今までの生活が激変したという経験をした人は多いと思います。夫が脳内出血で倒れたとか、末期がんを宣告されてあつという間に亡くなってしまったとか、あるいは阪神大震災や東北の津波によって、いっぺんに家族や財産を失ったなど。

かといつて一方で、今にも倒れそうで長い間もちこ

たえることもあつて、予測や予定も当てになりません。北朝鮮の体制は二十年ほど前から、まもなく崩壊するなどよく言われましたが、

変わりません。こういうように運命は一瞬でかわる場合もあれば、同じような状態がいやというほど続くことがあるので人間はあわててもしますが、

まだまだ大丈夫と腰を下ろしたりするので、いよいよ予測不可能なのが人生です。ですから腰を下ろしたいが下ろせないし、かといつて余り心配しすぎてもやっていけないというのが私たちではないでしょうか。人生は大丈夫と思いたいが思えない。こうなったらえらいことだと怖れ続けるとノイローゼになる。どうしたら良いのか戸惑うばかりです。

そういう場合、「何が本当の私の支えになってくれる

のか」という問題は大事だと思えます。それはとどのつまり「どっちへどころんでもよい」といえるような支えをもつことでありましょう。

お金がたくさんあつてもこれで大丈夫とはいえないし、私はずつと健康だったから心配ないとはいえない。子供が近くに居てくれるから安心だとはいえないし、頑丈な家に住んでいるから大丈夫とはいえない。商売や事業がうまくいっているからこれで安心とはいえないのが実人生ですね。

こういう不安定な人生で、私たちのおおかたは財物をたくさん蓄えることによつて人生を安定させようとするのが普通です。

しかし、こういう生き方の対極を生きてしかも安らかであった人たちもいました。例えば釈尊とかそのお弟子たちです。彼らは出家して道を求めた人たちです。家を出て家族ももたず、持ち物は三つの衣と托鉢の鉢

(応量器)そして僅かな薬だけでした。食物はその日ごとに托鉢をしていただいたものを日に一度いただきました。家もなく、石の上や木の下や洞窟などで衣を敷いて休みました。それでいて彼らは真理を求め真理を見いだしていたので安らかだったのです。

もちろん現代にこういう生き方をせよというのではありません。とても出来ません。しかしこういう生き方をした人たちがいたことも事実です。江戸時代の良寛上人などもこういう生き方をした希有なお方でした。現代でもインドやスリランカあたりでしたらまだそういうお方はおられるでしょう。

では普通の生活をしながら、人生において「どっちへどころんでもいい」といえるような生き方はできないのでしょうか。

それは可能だと思えます。もちろんそれは、どんなことが起きても大丈夫などと空元気や空頑張りをするの

でもなく、またちつとも心配しないなどと肩を張る必要もありません。いろんな不都合なことが起こつてくると、聖者ならともかく私たち凡夫は慌てたり困ったり、動揺したりするでしょう。その点はただの人としてお互いちつとも変わりません。

ただ念佛聞法し、南無阿彌陀仏を聞いて、そこに軸足をおくことはできるでしょう。

しかしそれは私たちの心をしつかりすることではありません。心はちつともしつかりしません。私たちの心ほどアテにも支えにもならぬものはありません。こんな心を頼りにしていると当てがはずれるのがおちです。江戸末期に出られた大谷派の香樹院徳龍師の言葉に私たちの心について、次のような言葉を残しています。

一。心は第一の敵なり、又一。この心は万劫の仇なり。一。心ほど口惜しいものはない。

一。身の毛よだつほど恐ろしきものはこの心なり。

一。おさへもかかへもならぬものはこの心なり。

一。心ほどしぶといわけの分からぬものはない。

一。心ほど心のすきにならぬものはない。

一。心ほど自由にならぬものはない。

一。心ほど心まよわすものはない。

一。心ほど我慢強くいふことをきかぬものはない。

一。世間の火は家をやく、心の火は身をやく。

一。だますものは世に多けれど、第一のだまし手のわるものが我が心。

風に揺れる柳のように、強い風が吹くと木や枝葉は左右にゆれます。私たちの心も同じです。動揺しずめです。

しかし柳の木の根はしっかりと大地に根付いていて倒れないように、さまざま不都合にであって心は揺れ動いても、その人の人生の軸足が大地に根付いていような、そういうようない

生き方は可能でありましよう。

この世で一瞬一瞬私に起こる現象は次々と来ては流れ去っていきます。

ですが、何時でも私と共にあつて、私たちの背後にあつて、見ることもさわることもできないけど、私のいのちはいつもそれに結びつけられている、そういう働きがあります。それは無量無限なるいのちの働きであり、それがアミダ仏です。

このアミダ仏において、その上で私たちの人生、一日、一瞬があります。つづめれば一瞬一瞬のいのちしかない私たちですが、その一瞬は無限なはたらきの中の一瞬です。その無限なアミダ仏の上に私はまるごと置かれており、いわば生かさされているのであります。

中国の梁・陳時代（10世紀）の仏教信者に傅大士という人がいて、仏教信仰に厚く、その人の言葉に「朝な朝な仏とともに起き、夕な夕な仏をいできて臥す」とあります。いつも仏と共にあり、仏と共に生きてい

るといつています。傅大士は自分の家の仏堂で毎朝夫婦で念仏していた人として伝えられています。

アミダ仏のいのちの上で寝たり起きたりする。楽しいときも苦しいときも嬉しいときも悲しいときも喜んでいるときも不安なときも、アミダ仏のいのちの土台、そこを一瞬も離れる事はできないし、離れる必要もないし、離してくださいさらないのがアミダ仏です。有り難いですね。どっちへどう転んでもアミダ仏のいのちの中の人生であり、生きても死んでもアミダ仏のいのちの中のいとなみです。

問題はこのアミダ仏を知るか知らないか、ここに人生の軸足を置いているかいないかに、その人の不幸が分かれる分かれ目があるといえましよう。「アミダ仏を知る」これが人生の根本問題であり、それを実現しようというところに宗教の存在理由があります。

アミダ仏とは無量の光明でありのちであります。光明の働きとは智慧と慈悲

の働きです。アミダ仏を「知る」といつても、頭で聞いて「わかりました」と知識的に納得して知るとい

ではなくて、実際に感知する。実感するという知り方です。ひとたびアミダ仏を知るとそれは生涯消えず、こわれず、人の全人生を支えてくださる。そういうアミダ仏を知るのです。

アミダ仏を知るとアミダ仏は私とは離れがたく一つになつてましますことを知るので。この関係は自分がどのような状態になろうともなくなるらない関係なのです。人間が置いた関係ではなく、アミダ仏によつて置かれた関係だからです。

雨の日も風の日も、調子の良いときも悪いときも、成功したときも失敗したときも、孤独なときも賑やかなときも、私をだいていたもうアミダ仏です。それこそ運命は一瞬で変わりますが、運命もアミダ仏のおん

いのちの中のいとなみです。どのような運命もアミダ仏は引き受けてくださつてい

ない。

るのです。

この関係は全ての人の足下にいつでもある恵まれた関係ですが、この関係は気がつかない限り、この恵みが自分にとって生きた恵みにはならないのです。そこでそれに気づくことが大事になります。

ところでこのアミダ仏を私たちが知ることが私たちの計らいで出来るかという、それが出来ないのです。

それは喩えてみれば、小さなコップに海の水を入れるようなもの、あるいは竿で空の月をたたき落とそうとするようなものです。そのように私たちの自我でアミダ仏を知ることが出来ないのです。

ところが有り難いことにアミダ仏の方から私の方に会いに来てくださり喚びかけてくださっているのです。その喚び声が南無阿弥陀仏のお念仏の声です。このお声に喚びさまされて、私たちはアミダ仏を知ることが出来るのです。

今ここで南無阿弥陀仏と

称えます。その一声のお念

仏は私の耳に「ナムアミダブツ」と聞こえます。このお声のアミダ仏の喚び声で「我ここに汝と共に居る。汝をヒキウケテイル」と喚びかけておられるのです。

このことはすぐには承知できないでしょう。しかし、お念仏に親しみ、よくよくアミダ仏のお心を聞いていくと、ふっと「ああ私のためのアミダ様」と感じるときがきます。

こんな簡単なことで人生の根本問題の解決がつくのかと思いますが、真理は単純でありながら深く、しかも実に身近に働いている真理なのです。親鸞聖人はこれを「撰取不捨の真理」と教えてくださいます。撰取不捨の真理は誰の足下にも与えられている真理であり、この真理はいつも今ここに私に即してある万人共通の普遍的な真理です。真理であり真実であり働きです。

私の行為の善悪に先だつてある真実です。ですから私の煩惱悪業によって損なわれたり壊れたり汚れたりし

ない真実です。これに気が

つくことが何よりも大事です。このアミダ仏を畢竟依といわれ究極のこわれのない私たちの依りどころになつてくださるのです。宗祖のご和讃に

清浄光明ならびなし  
遇斯光のゆえなれば

一切の業繫ものぞこりぬ  
畢竟依を帰命せよ

とありますが、この畢竟依（畢竟のよりどころ）がアミダ仏なのです。

この撰取不捨の真理はそれを見失って右往左往している私に「撰取不捨の真言」すなわち南無阿弥陀仏の言葉となつて喚びづめに喚びかけてくださっています。有り難いですね。このことを発見し、このことを知らせ、このことを伝えてくださつたお方が釈尊であり七高僧、親鸞聖人です。

南無阿弥陀仏は「我汝と共にあり、汝を引き受けている、浄土に連れて行く」といわば「助ける」「ヒキウケル」とよびかけたもう大悲の仰せです。（了）

## 【住職雑感】

四月に入り非常事態宣言が兵庫県にも

発出され、外出に制限がかかる。お参りは「不要不急」の事なのかどうかは分からないが、お参りをしてほしいというお家には寄せていただいている。仏前でマスクをかけて経典を誦するのには抵抗があるので、その時は外す。いろいろな集まりは殆どなくなったので、長年経験しなかったような暇な日を過ごすことになった。余り家に閉じこもるわけにいかないで近くの武庫川の河川敷に歩きに行く。平生は人はポツリポツリなのだが、

なんと平生の二十倍ほどの人が散歩やジョギングやボール投げあるいは楽器の演奏などさまざまに振る舞っている。幸い武庫川は河川敷が広くて景色が良く気分がいい。かといって余り人が多いとやや感染の危険があるので少し用心しつつ小一時間ほど念仏称えながら歩く。さまざまな植物や鳥や川面の変化など、自然が神秘的である。河川敷はいつ歩いてても感動がある。日が違えば同じ風景というものはない。日々風情が少しずつ違ってくるので趣がある。今後、コロナの問題はどうなるのか分からない。恐らく簡単に収束すまい。こんな時は家に居ることが多くなるので、日頃読めない本を読んだり人生について考えたり、有効に使いたいものである。

昨日はユーチューブでベルゴレージの「悲しみの聖母」（スターバト・マリーテ）を聞く。シュトゥツマンの指揮であった。ナタリー・シュトゥツマンは「サイトウキネン・フェスティバル」に招待されて小澤征爾のバツハのматыに出演したのを以前TVで観たことがある。この時の演奏で小澤の力を認識した。それまで「日本人の指揮者」というだけでどこか低い評価をしていた自分の愚かさを知らされた。матыでアルトを受け持ったのがシュトゥツマンで彼女の「エルバーメディヒ」を歌い上げる悲哀の歌声の深みには涙を禁じ得なかった。そのことがあって彼女の「悲しみの聖母」を聴いた。彼女は歌わなかったが良い演奏だった。ベルゴレージの音楽を意欲して聴いたのは初めてである。若干二六歳で一七三六年にイタリアの修道院で亡くなった天才だが、この曲は彼の最後の曲になった。宗教的で美しい。最後の十二曲目はことに悲哀に満ち、迫力ある「アーメン」で感動的に終わり、魂が揺さぶられる。

最近ユーチューブばかりで音楽を聴く。聴くのに手間暇いらぬから楽である。しかも費用が殆どかからない。最近CDが売れないとの嘆きを音楽関係者から聴くが私のような者がいるから無理もない。ユーチューブで聴いてナマの演奏会で聴かないのは音楽愛好者の部類には入らないと言う著名な女流ピアニストがいたが、ユーチューブでの音質は悪くても十分楽しめる。（了）

# 阿闍世王は瞋怒して

(和讃問答)

阿闍世王は瞋怒して  
我母是賊としめしてぞ  
無道に母を害せんと  
つるぎをぬきてむかいける

(浄土和讃)

現代語意識（アジャセはダイバダツタにそののかされて父王のビンバシヤラを牢獄に幽閉し、食物をたちました。その間に王妃のイダイケはこつそりと食事を運んで夫のいのちを長らえさせていました。それがアジャセに知れ彼は激怒して「母は賊である父に加担したからこれも賊である」と、刀を取ってわけなく母を殺そうとした）

N 「このご和讃の意味は現代語訳でほぼ分かるのですが、ビンバシヤラ王はなぜ息子のアジャセに幽閉されたのちを断たれるようになったのですか」  
D 「この事件は釈尊がおら

れた当時のマガタ国の都だった王舎城の宮廷内で起こりました。世継ぎの王子であつたアジャセは国の政策について父王とは意見が対立していたとも云われていますが、父の王を殺すまでになつたのは、釈尊の弟子でありながら釈尊を嫉み憎んでいたダイバダツタのそののかしによつてアジャセは父王の殺害を決行したのです」  
N 「そのそそのかしとは」  
D 「それは詳しくはここでは申しませんが、アジャセが生まれようとした時、ビンバシヤラ王は、アジャセは将来父王を殺害するだろうという占い師の予言を聞いて大変不安になり、自分の子でありながら、殺そうとしたのです。その時にアジャセの母イダイケは夫に従つて、やむなく自分の子を殺そうとして高い所から産み落としたのですが、赤

子は指を折つただけで助かつたのです。生まれてみると可愛いので育てることになつたのが今のアジャセだ、とダイバダツタがアジャセにたきつけたのです。それを聞いてアジャセはひどくショックを受け父の殺害を行うようになったといわれています」  
N 「両親が自分を殺そうとしたという話を聞いてアジャセは大変ショックだったでしょうね」  
D 「ええ、非常な怒りと憎しみと孤独と絶望感が一挙に襲つてきたと思います。この世での人間関係の元は親子の信頼関係ですから、それが崩壊すると人間への不信感が強くなり、他者との関係も難しくなりやすいですね」  
N 「では親を殺したアジャセはその後どうなつたのですか」  
D 「父を殺した後、大変後悔し、身心ともに苦しみました。大臣の耆婆に誘われて釈尊の処に説法を聞きに行き、釈尊の説法によつて仏の大悲心が自分にか

られていたことを知つて大変感動し、大悲の情けに心が癒やされ、新しくよみがえることができました」  
N 「この和讃ではアジャセはイダイケを「我が母は賊だ」といつて母さえも殺そうとするのですね。なぜ母を賊と言つてののしつたのですか」  
D 「イダイケはビンバシヤラが幽閉され餓死させられようとした時、夫王のいのちを助けようとしてこつそり食事を運んだのです。それが見つかつて、アジャセは父の王はかつて自分のいのちを奪おうとした賊であり、その賊である王を助けようとしたのだから母も賊である、と怒つて母をも刃で殺そうとした時、月光と耆婆の二大臣が駆けつけてそれをいさめたので殺害することをやめ母を宮殿の奥座敷に閉じ込めてしまふのです」  
N 「そういう、まことに悲惨な出来事が家族の間であつたのですね」  
D 「ただこの事件を通して苦悩せるイダイケは釈尊に

会い、アミダ仏の本願を聞いて救われ、アジャセもやがて仏の大悲にめざめることになつていったのです」  
N 「ということは大変悲惨な出来事であつたけれども、そういう縁がまた人が救われる縁にもなつたのですね」  
D 「ええ、それを説かれたのが観無量寿経や涅槃経であり、そういう悲劇的な状況に於ても真の救いがあることが本願念佛の教法です」  
N 「それほどの大いなる仏の慈悲がお念仏の教えとして説かれているのですね」  
D 「そうです」

(了)



【お知らせ】  
五月十五日の名古屋・高畑会館での法話会は新型コロナウイルスの件により中止になりました。

